



Oral Health Behaviors and Associated Factors in Patients with Diabetes

Kuwamura, Yumi

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2013-09-11

(Date of Publication)

2014-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3230号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003230>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文の内容要旨

氏名 桑村由美

論文題目 Oral Health Behaviors and Associated Factors in Patients with Diabetes
(糖尿病患者の口腔保健行動の実態とその関連要因)

[目的]1型糖尿病もしくは2型糖尿病患者における口腔保健行動の実態とその関連要因を明らかにすることが本研究の目的である。

[方法]薬物療法中で有歯顎の外來通院中の糖尿病患者 128名(男性71名、女性57名、平均年齢55.6±15.5歳)を対象に、事前の面接調査および文献をもとに作成した質問紙を用いて糖尿病の療養のために行う自己管理行動と口腔保健行動についての質問紙調査を行った。口腔保健行動は口腔衛生行動と歯科受診・受療行動から構成した。分析方法は、口腔保健行動を従属変数、属性因子・口腔因子・認識因子・自己管理行動を独立変数として、多重ロジスティック回帰分析を行った。

[結果](1)対象者の口腔保健行動は一般の人を対象とした調査結果よりも良かった。(2)口腔衛生行動の関連要因については、①歯磨きは習慣であるという認識は歯磨き頻度と強い関連があった(OR, 0.07)。②歯磨きは習慣であるという認識は1日の歯磨き回数とも関連していた。③糖尿病と口腔の状態との関連について知りたいという認識がある人ほど歯と歯茎の間を意識した歯磨きを行う傾向が強かった(OR, 0.02)。歯磨きの効果を期待している人(OR, 0.06)や歯茎の腫脹がない人(OR, 13.51)や糖尿病網膜症がない人(OR, 9.23)ほど、歯と歯茎の間を意識した歯磨きを行っていた。④奥歯で噛みしめることができる人ほど磨き残しのないように隅々まで歯磨きを行っていた(OR, 0.06)。⑤糖尿病網膜症がある(OR, 3.86)、歯茎からの出血がある(OR, 3.30)場合には、歯間ブラシやデンタルフロスの利用は少なかった。⑥歯は体の一部であるという認識がある人(OR, 0.20)や糖尿病網膜症がない人(OR, 3.94)、靴の中を観察する人(OR, 1.24)ほど、歯や歯茎の状態を鏡で観察していた。(2)歯科受診・受療行動の関連要因については、①歯の動揺がない人(OR, 8.04)ほど、かかりつけ歯科医があった。②ゆっくりよく噛んで食べる人ほど、定期的に歯科受診をしていた。③インスリンなどの注射を行っている人ほど糖尿病について歯科医に情報提供をよく行っていた(OR, 0.15)。

[結論]本研究では糖尿病患者の口腔保健行動の実態が明らかになった。口腔保健行動の促進因子は、口腔の状態と糖尿病に関する関心が高いこと、口腔保健行動を行うことが糖尿病に効果があるという効力期待が高いこと、口腔内の状態が良いこと、糖尿病網膜症がないこと、自己管理行動の習慣があることであった。今後は糖尿病患者への口腔保健行動への介入方法の開発、特に糖尿病網膜症がある人や口腔内の状態が良くない人への看護介入の必要性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

氏名	桑村 由美		
論文題目	Oral Health Behaviors and Associated Factors in Patients with Diabetes (糖尿病患者の口腔保健行動の実態とその関連要因)		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	松田 宣子
	副査	教授	安田 尚史
	副査	准教授	中山 貴美子
	副査		印
要 旨			
<p>本研究の目的は、1型および2型糖尿病患者の口腔保健行動の実態とその関連要因を明らかにすることである。対象者は128名の外來通院中の糖尿病患者で、薬物療法中の有歯顎者である。事前の面接調査と先行文献から作成した質問紙を用いて調査を行った。口腔保健行動は、口腔衛生行動と歯科受診・受療行動から構成され、その実態と関連要因を明らかにするために、分析には多重ロジスティック回帰分析を用いた。結果、対象者の口腔保健行動は一般の人を対象とする調査と比べ全体的に良かったことや糖尿病と口腔内の状態に対する肯定的な関心(オッズ比0.02)、奥歯で噛みしめることができること(オッズ比0.06)、ブラッシングの効力感(オッズ比0.06)、歯肉の腫脹がないこと(オッズ比13.51)、自己管理行動が習慣になっていること(オッズ比0.07)、糖尿病網膜症がないこと(オッズ比9.23)が口腔衛生行動と強く関連していた。歯の動揺がないこと(オッズ比8.04)、インスリンやGLP-1受容体作動薬を用いた注射療法を行っていること(オッズ比0.15)が歯科受診・受療行動と強く関連していた。結論、口腔内の状態が良いこと、糖尿病網膜症がないこと、自己管理の習慣、糖尿病と口腔の状態についての関係についての肯定的な認識および口腔内を良い状態に保つ習慣が糖尿病にも効果があると思うことが、口腔保健行動の促進要因であった。以上のことから糖尿病患者の口腔保健行動の実態が明らかになり、今後の糖尿病患者への口腔保健指導について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。</p> <p>よって、学位申請者の桑村由美氏は、博士(保健学)の学位を得る資格があると認める。</p>			
<p>Oral Health Behaviors and Associated Factors in Patients with Diabetes. Yumi Kuwamura, Nobuko Matsuda. Bulletin of Health Sciences Kobe, Vol. 28, 2013, in press.</p>			